

毎日の日々に

コーヒーをいれるのは毎朝の日課になっている。連れ合いも飲むので二人分、台所でゆっくりいれている。教科書通りの手際で挽いた豆を蒸らし、最初に湯を注いだときの、滑らかな泡立ちを見るのは何とも言えないほど心地よい。

時は金なり

とはどういう意味だっけ？

時間は大切なものだから、無駄にしてはならない、といった意味だったと思うが、不意に思い出すと、読み方は「ときはかねなり」か「ときはきんなり」かあやふや。恥ずかしくなって調べてみると、読み方はどうやら前者らしい。意味は大体あっていた。

泡立たなくなっただけで、湯を注ぐのをやめる。毎日大体同じ量いれているうちに、このくらいでやめるのが一番美味しいと分かってきた。まだ出るのもったいないような気がするが、コーヒー豆も、飲まれてしまうために生まれてきたのだとしたら、搾り取られるのとどちらがよいだろうか。

などと物思いしつつ、彼女の朝食とお弁当を準備しながら、こうして二〇分くらいかけて入れたコーヒー一杯が、僕の朝食である。

彼女の海外での仕事が始まるに伴い、入籍して移住し、もっぱら家事は僕が担当している。

夫婦の役割分担はとても大切である。彼女のキャリアを素直に応援しているし、相談を受け、アドバイスすることもある。遅く帰ってきてもあつたかいごはんをちょうどよく準備し、一緒に食事をとる。料理も楽しい。彼女の仕事充実しているとすれば、それは夫婦としての功績だと思える。

とは言っても、充実感のない日も多い。

もともと仕事をするのが嫌いなわけではなかった。毎日出勤し、前の日までにやり残した、準備していた仕事がある。この有難さはしなくなってみて気づく。今は大抵いつも、「いつてらっしゃい」と見送ってから、「さて、今日は何しようかね」と考える。

まだ入っているコーヒーを持って、窓の明るい場所へ外を見ると、きれいな庭の上のベランダで、朝食をとっているおじさんがいる。この人は長い時



間、あそこでそのまま新聞を読んでいる。

この人のことは毎日思い出すが、毎日忘れる。太っちよの勤勉なかわいらしい姿ににんまりして、「もう一杯飲もうかな」と思ったりする。

豆を挽く手の感触を確かめ、湯が沁みこんでいく音と香り、一滴一滴落ちるのをそれとなく眺め、楽しみにじゅくり待つ。こういうことは何となく、社会で暮らしていく上でとても大切なことと似ている。だから、コーヒーひとつきちんといれられれば、ほかのこ

とも丁寧に向かい合うことが出来る。そのうち主婦、そのお務めの有難さが自分で分かる。そう信じよう。役割分担の上のことだから、いつまでやるか分からないけれども。

ちなみに湯飲みで手にとって飲むのが好きだ。訪ねてきた知人、友人にいられて出すのも愉しみにしている。

コーヒーをいれて飲むこと、それ自体が、僕にとっては理想の自分に近づくための、とても大切で、芳ばしい、素敵な時間である。

(うえはらゆうき)